

科目担当者氏名		科目担当者連絡先（メールアドレス）	
小林大祐・山中千恵・島岡哉		shimaoka@jindai.ac.jp	
連絡責任者氏名		科目設置機関名	
織田 暁子		仁愛大学 人間学部 コミュニケーション学科	
授業科目名	科目認定番号	受講者数	
社会調査演習 a	JNAa-130701-2	11人	

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

社会調査演習a(前期)では、毎時間、質的調査法に関する論文、質的調査の実例として複数の論文をよみながら、ゼミ形式で演習を行った。同時に、調査計画の設計とテーマの絞り込みを、自ら、先行研究を調べる作業を通して行った。

その過程で、ほとんどの学生が地域社会に出でのインタビュー調査を行う調査設計を行っていった。この点に関しては、

学内の同世代ではない人々の生業や考え方に触れるという機会を持って有意義であった。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

地域、身体、スピリチュアリティ、サブカルチャー——質的調査法からのアプローチ

2. 調査の内容／概要：

本クラスは、統一テーマを設けていないため、毎年多岐にわたる興味関心に基づく報告書が提出される。そのため、単なる興味関心で終わらないようにするために、前期は、調査方法論と対象、調査法の絞り込みに重点を置いている。そのため、前期中に現地調査に入る学生は少ない。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

それぞれの学生の調査テーマに従い、調査対象者を選定する。その際には、教職員や受講していない学生が持つネットワークも使いながら、アポイントをとり、主にインタビューを行っている。

4. 主な調査項目：

本年は、地域、身体、スピリチュアリティ、サブカルチャーの4つの領域で、報告書が作成された。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

主として、半構造化インタビューの手法を用いる。ライフ・ヒストリーに近い方法をとったものもある。

主として夏休み中から、現地調査が開始される。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

2013年7月～ 調査地は、各学生のテーマにより決定。

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

学生による能力の差もあって、一概に評価を下すことはできない。ただし、本学の地元密着型大学という特性もあってか、学生達が収集したデータには、普通ならそこまでは教えてくれないであろうという内容も相当含まれている。いわゆる「モデル・ストーリー」の採取で終わらなかった点は評価できる。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

半構造化インタビューに基づき、コーディング。ただし、教員が、これは、インタビューの流れを切らない方がいい（コーディングしすぎると話がわからなくなる）と判断した場合は、かなり長い語りで構成された報告書となっている。

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

主として大学3年という年齢階梯で、普段意識していない認識枠組みやメカニズム、意味を抽出できたことは有意義であった。たとえば、地域社会でのフィールドワークを行った学生は、観光に関する考え方の地域差、世代間の認識の差、などを浮かび上がらせている。

10. 報告書刊行の予定と概要：

2014年3月刊行済。